

知的障害児に対する「自立活動の個別の指導計画」

－ 本人参画型の作成・活用の効果 －

特別支援教育分野(19220916) 志 鎌 知 弘

本研究は、特別支援学校に在籍する知的障害のある高等部生徒に対して、本人参画型の「自立活動の個別の指導計画」を作成・活用し、その効果を検証することを目的としている。生徒が自立活動に取り組む意義と自己理解を経て、自立活動の目標や学習内容を考えた後、指導実践を行った。その効果を考察した結果、生徒は卒業時をイメージして目標を設定し、課題や活動に意欲的に取り組み、本人が参画することの有効性を示した。

[キーワード] 自立活動, 個別の指導計画, 本人参画, 知的障害, 高等部

1 問題と目的

(1) 自立活動について

『特別支援学校高等部学習指導要領』(文部科学省, 2019)は、高等部における教育目標として、高等学校教育の目標の他、「生徒の障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服し自立を図るために必要な知識、技能、態度及び習慣を養うこと」と自立活動に関する目標を掲げている。さらに、自立活動の目標には、困難を主体的に改善・克服することや心身の調和的発達の基盤を培うことを挙げている。知的障害児に対しても、障害の状態による困難の改善等を図るために、効果的な自立活動の指導の必要性を指摘している。

自立活動の指導にあたっては、一人一人の実態を把握して、個別の指導計画を作成し、指導することが示されている。今回の学習指導要領の改訂では、実態把握から指導目標、指導内容の設定までの手続きの中に「指導すべき課題」を明確にすることや自己選択・自己決定の機会を設けること、自立活動の学習の意味理解を促す指導内容を取り上げることなどが示されている。また、実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れの例にも本人の願いを重視した事例が多数挙げられている。菊地(2020)は、児童生徒の強みや思い、願いを反映することや理解に関することの重要性を述べている。

一方で、個別の指導計画の作成に関して、主に教師が作成して保護者と情報を共有し、本人はその内容については理解しきれていないという課題も生じている。藤井・高田屋(2017)は、個別の教育支援計画は教師が単独で作成し、本人・保護者

がそれを追認するようなものではなく、本人・保護者が作成と評価に主体的に参画するシステムを求めている。

高橋・藤井(2020)は、生徒本人を主体とした個別の教育支援計画の実践において、目標や方法を主体的・具体的に考えられるようになったと、有効性を示唆している。一方で、導き出された学習課題と学習指導要領との関連づけを明確にし、教育課程の更なる充実が図られるようにしていくことを求めている。また、知的障害児・者が目標を具体的に伝えたり課題解決方法を考えたりすることに関して、困難が生じやすいことから、教師の一層の工夫を求めている。目標や学習内容の設定に関しては、自立活動も含め個別の指導計画作成にも当てはまる。

他に、松田・是永(2020)は、自立活動に関する現状と課題として、児童生徒に自己選択の機会を設定している学校が多い一方で、自己評価に取り組んでいる学校が少なかったことを挙げ、課題としている。

個別の指導計画に記載される評価はいわゆる通知表としての役割を果たしているが、教師の総括的評価としての意味が大きい。一方で、授業時や単元中に児童生徒自身が振り返りを行うことが多くなっており、その活動は形成的評価としての意味合いがあるものの、適切に自己評価しているかどうかについては曖昧さがあると考えられる。

(2) 昨年度の研究から

志鎌(2020)は、生徒本人が参画した自立活動の個別の指導計画を作成して、その満足度を分析し、本人参画の有効性を示した。一方で、事例数の拡

大と指導計画作成後の指導実践の有効性や評価等の検証については本研究への課題となった。

(3) 目的

『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編(幼稚部・小学部・中学部)』(文部科学省, 2018)では, 自立活動は, 特別支援学校の教育課程に設けられた指導領域で, 自立活動の指導の時間だけでなく, 学校の教育活動全体を通じて行うため, 各教科等における指導との密接な関連を保つことが必要であるとしている。今井・生川(2014)は, 各教科や合わせた指導の中で, 具体的にどのような指導を行うか内容を整理する必要性を示している。同様に, 藤井ら(2018)は, 自立活動は各教科等との関連に対する認識が不十分であり, 自立活動の捉え方に対して, 各教科等との関連を図ることの重要性を述べている。三浦(2020)も, 自立活動の指導目標や内容が, 各教科等の指導目標や内容と混同していることを指摘している。

そこで, 本研究では, 志鎌(2020)の実践を基に, 対象生徒を新たに複数名設定し, 「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」を作成し, 活用しながら指導実践を行う。その有効性の検証に加えて, 各教科等との関連性についても本人参画した場合の効果についても検証することを目的とする。

2 方法

(1) 「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」作成

① 「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」

生徒本人が参画して作成する自立活動の個別の指導計画のこと。自立活動の内容6区分にて自己理解し, 目標や学習内容を考え, 指導を実践する。

実践にあたっては, 『特別支援学校学習指導要領解説総則等編(高等部)』(文部科学省, 2019)にあるように, 『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編(幼稚部・小学部・中学部)』(文部科学省, 2018:以下, 解説自立活動編)に準じて行う。

② 手続き

「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」の作成と指導実践を10~12回行う。(生徒への個別の実践によって回数が異なる)

(2) 対象生徒, 期間

① 対象生徒

筆者の勤務校である特別支援学校(知的障害)高等部在籍生徒3名を対象とする(以下, 生徒A, 生

徒B, 生徒C)。3名とも知的障害と併せて自閉症もしくは自閉的傾向にある。

勤務校で作成した生徒の前期の「自立活動の目標」は以下の通りである。勤務校では, 資質・能力の三つの柱で目標を設定している。

生徒A

- ・伝え方と表情によって, 相手の受け取り方が異なることが分かる。
- ・相手の気持ちを考えながら, 伝え方と表情を判断し, 友達や教師と穏やかにやりとりする。
- ・自分の言動やそのときの表情を振り返りながら, 伝え方に気を付けようとする。

生徒B

- ・どのようなときに自分の気持ちが落ち着かない状態になるのかが分かる。
- ・気持ちが落ち着かないときにどうすればよいかを考えて実行する。
- ・自分の気持ちを整えることができた達成感を得ながら, 落ち着いて活動を続けようとする。

生徒C

- ・様々な場面で, 友達と気持ちよくなかかわるための言動が分かる。
- ・場面や状況に応じて, どのような言動をとれば良いか考えたり, 自分の言動を振り返ったりしながら友達とかかわる。
- ・言動に気を付けながら, 友達とかかわろうとする。

加えて, 勤務校にて自立活動の目標を設定する際, 生徒の実態を把握し, 中心的な課題を記したものが以下の通りである。

生徒A

- ・言い方, 表情, タイミングなどを考えながら, 他者と互いに心地よくやりとりする。
- ・自分のすべきことや周りの状況を考え, 自分から行動する。

生徒B

- ・周りの状況に自ら気づき, 状況に合わせた行動をとる。
- ・人前で鼻に指を入れないなど, 衛生面のマナーに気を付けて生活する。
- ・分からないときや困ったとき, 自分の意思を相手に伝えながら落ち着いて活動に取り組む。

生徒C

- ・時間を意識し, 余裕を持って行動する。
- ・状況に応じた声の大きさや言葉遣いに気を付け

て話す。

- ・相手や場に応じたかかわり方を行う。
- ・相手の方を向いて話を聞く。

②期間

20XX 年 5～12 月に、ホームルームや教育活動全体を通して実践する(表 1)。第 6 時以降は生徒への実践によって回数が異なる。

表 1 主な学習計画

時数	内容	人数
1	・自立活動について	3 人
2	・自己理解の 6 区分 (していること・頑張りたいこと)	3 人
3	・自己理解の 6 区分 (していること・頑張りたいこと)	3 人
4	・自己理解の 6 区分 (していること・頑張りたいこと) ・将来の夢 (どんな社会人になりたい) ・個別の指導計画との比較 (どこが同じか)	3 人
5	・目標設定 (卒業したらどうなりたい) ・学習内容検討 (今何をやるとよいか) ※本人参画型の指導計画の完成	3 人
6 ～9	・学習内容の更新・振り返り (目標達成に向けてやること)	個別
10	・振り返り (卒業に向けて・目標の確認)	3 人

(3) 指導実践

勤務校において作成している個別の教育支援計画や個別の指導計画を基に、自立活動の流れ図や志鎌(2020)の書式を基に、生徒と「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」(図 1)を作成する。その際、学校で作成している個別の指導計画にある自立活動の指導目標を本人用に文字を大きくしたりルビを付けたりして、生徒が作成したものと比較する活動も実践する。主たる実践は、担任 D(筆者)が行う。

「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」作成では、自立活動の内容の 6 区分から、自分の今の状況や思っていること、受けているサービスなどについて生徒自身の自己理解を図った。その際、できていることや課題となっていることについて

も検討し、目標設定については、卒業時になってほしい姿として生徒がイメージしやすいようにする。この段階で担任 D が内容同士の関連を図り、生徒の思いや考えを入れながらも、「インターネットで調べたい」というような、単にやりたい内容にならないよう留意する。指導計画の学習内容の部分を拡大し(図 2)、目標達成につながるにはどのような学習内容が良いか考え、更新しながら実践を進める。



図 1 本人参画型の自立活動の個別の指導計画(書式)

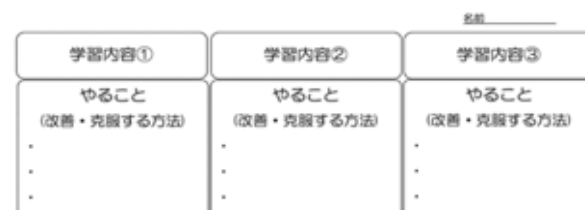


図 2 学習内容と改善・克服する方法(書式)

(4) 分析方法

分析は、実践に使用した学習プリントの記入内容や授業中の発言(ビデオ記録)、授業記録等を基に、担任教師の担任 D と担任 E が行う。担任 E は昨年度から担任している。生徒の変容について、学校の教育活動全体を通して指導効果や各教科等の時間との関連についてこれまでの実態と比較し分析する。

(5) 倫理的配慮

生徒には口頭による説明を、保護者には面談時に説明を行い、承諾書の提出をもって同意を得た。

3 結果

(1) 「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」の内容

生徒は、自立活動の内容の 6 区分から、自分の受けているサービスやできていること、苦手だと思ふことなどについて整理した(第 1～4 時)。

内容を整理して、生徒は卒業時になっていたい自分の目標を以下のように設定した(第5時)。

生徒A
携帯電話を持ていろいろな人とかかわりたい。
生徒B
社会人になって色々な人と一緒に仕事をしたい。
生徒C
しっかりした仕事をしてお金をもらいたい。

また、目標を達成するために、どのような学習に取り組むかについては、担任Dと共に考え、以下のようになった(第5時)。

生徒A
<ul style="list-style-type: none"> ・落ち着いて過ごす。 ・丁寧な言葉遣いをする。(上から目線はしない) ・健康な体づくりをする。
生徒B
<ul style="list-style-type: none"> ・イライラしても時間をかけずに落ち着く。 ・ていねいな言葉づかいをする。 ・健康な体づくりをする。
生徒C
<ul style="list-style-type: none"> ・健康な体づくり(体重増加に注意する)。 ・ローマ字入力と言葉と数のスキルアップ。 ・ていねいなかかわりをする(声の大きさ)。

(2) 自立活動の指導実践の内容

設定した学習内容について、担任Dとのやりとりから、改善・克服することを「やること」として、「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」の学習内容の欄を拡大して記録した。「やること」は、担任Dが整理しながら学習内容を追記して以下のように更新した。(第6～9時)

- 生徒A
- ・更衣室で休憩をする。
 - ・LINEみたいなやりとりで落ち着く。
 - ・言葉づかいに気をつける。
 - ・(語尾に)「です」「ます」をつける。
 - ・話している人を見る。
 - ・ランタイムの時、友だちと走る。
 - ・こぼさないように薬を飲む。
 - ・食べすぎに注意する。
 - ・転ばないようにゆっくり歩く。
- 生徒B
- ・深呼吸する。
 - ・すわる・立つ・動く。

- ・先生と話をする。
 - ・五七五(格言風)にするといい。
 - ・体をきたえる(スクワットなど)。
 - ・友だちと走る。
 - ・一人でも走る。
- 生徒C
- ・音楽に合わせて走る。
 - ・家でも、うでたてや、スクワットをする。
 - ・国語では、PCを使ってローマ字を覚える。
 - ・苦手の勉強もいろいろやってみる。
 - ・聞き返すときの声に気をつける。
 - ・声が大きくなるようにする。

実際に生徒Aが担任Dと確認しながら手書きで作成した自己理解後に立てた目標と学習内容、「やること」を図3,4に示す。

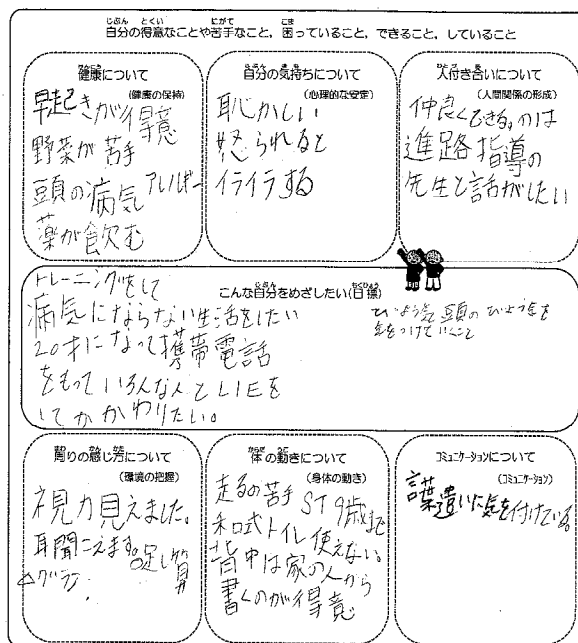


図3 自立活動の個別の指導計画(手書き)

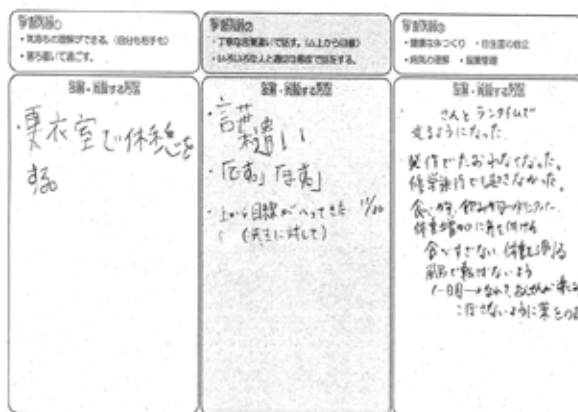


図4 学習内容と「やること」(手書き)



図5 整理した生徒Aの「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」

生徒A とやりとりしながら担任Dが整理して、最終的に「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」としてまとめたものを図5に示す。

第10時では、卒業時やその後の社会人としての生活をイメージして、これまでの学習を振り返り、目標を再度確認した。その際の生徒の内容を以下のようにした。

生徒A

- ・携帯電話を持ってLINEして人とかわりた
- 生徒B
- ・仕事をしてお金をもらえるようになりたい
- 生徒C
- ・学校を卒業したら、仕事を一生懸命取り組みたい
- ・健康を考えて長生きしたい
- ・いろいろ頑張ってやってみたい

(3) 学校での事例(各教科等や普段の様子との関連)

自立活動の学習と関連が見られた事例の一部を表2に示す。

表2 関連が見られた事例

事例1: 生徒Aは発作があることや疲れることを理由に、体育でのランニングにおいて、歩くことが多かった。自立活動の内容から「健康な体づくり」に学習内容を決めた。以降、友達と一緒にゆっくりの速さだが、走ることが多くなった。その

理由を聞かれると、「病気にならないようにしたい。」「友達となら走り続けられる。」と答えた。

事例2: 生徒Aは言葉遣いを課題にしながらも大人に対して、「〇〇なんだけど。」「〇〇してもらっている。」「友達口調が多かった。国語の敬語の学習の後、自立活動の学習内容に「上から目線で話さない」と書いて、その方法として「(語尾に)です、ますをつける」と付け足した。その後、「〇〇ですか。」「お願いします。」など、どの教師に対しても丁寧に話すことが増えた。

事例3: 生徒Aは頭痛を訴えることが時折あった。これまでは、教師に、「どうしたらいいですか。」とすぐに聞くことが多かった。作業学習時に頭痛を感じた際、「水を飲んで、少し休憩します。」と自分で考えて教師に伝えることができた。

事例4: 生徒Aの保護者からの連絡帳で、「自宅で不機嫌になる。原因が分からない。」と相談があった。生徒AはSNSのチャットのようなやりとりをしたいと思っていた。ホワイトボードにチャットのようなデザインの吹き出しを描き、担任Dとやりとりをした。すると、食事の献立や家族のかわり方に不満があったことを伝え、なぜ不機嫌になっていたのか明らかにできた。

事例5: 生徒Bは間違いを指摘されることが苦手

で、プリントに✓のマークを付けられることを嫌がっていた。数学で、問題を間違えた時に、興奮しながら「正解は3番の○○。」と落ち着かなくなることがあった。担任Dが間違いを指摘する時に、気持ちを確かめ「間違えた時はどのようにしたらよいですか。」と生徒Bが考える問い掛けを心がけると、「直せばいい。」と興奮することなく書き直すようになった。

事例6：生徒Bは普段から、単語で答えることが多かったが、国語での五七五の指導から、自立活動にて適切な行動を格言風にする取組を実践した。生徒Bが普段から話す「社会人」を用いて、「ですますをつけるあなたは 社会人」とし普段から活用すると、語尾に気を付けて話すようになった。

事例7：生徒Bは、時刻を守って行動しようとすることが多い。一方で自分の世界に入ると、次の活動に遅れ、落ち着かなくなることがあった。着替えて時間がかかる時に、「帰りの会が○時だから、何分前に着替えが終わるといいですか。」と時間を逆算した伝え方をすると、時間を意識して行動することが多くなり、そのことで不安定になることが減少した。

事例8：生徒Cは肥満体型であり、体育のランニングなど、少し走っては歩くことが多かった。自立活動の学習に加え総合的な探究の時間においても健康な体について探究し、継続して走るが増えた。さらに、自宅周辺でもランニングすることがあった。実際に体重が約7kg減った。

事例9：生徒Cは間違えたり、自分の思いと異なることを言われたりすると、「ちがくてちがくて。」と大きな声になることがあった。その時に、担任Dが「どんな気持ちですか。どのような話し方だと思いますか。」と伝えると落ち着いた口調になった。同様のやりとりを複数回し、声が大きくなった時に、「あっ。」と自分でも気が付き、声が大きくなること自体減った。その後の産業現場等における実習でも落ち着いて行動することができた。

4 考察

(1)「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」の内容
個別の指導計画、自立活動の中心となる課題と比較すると、個別の指導計画等を作成する際に、本人や保護者の思いや願いを受けていることもあるが、生徒が立てた目標や学習内容と関連している

内容が多く、生徒は、適切な目標や学習内容の設定ができたと考える。また、自立活動の指導目標が一つの課題について資質・能力の三つの柱で設定しているが、生徒は、その他の実態や課題に対しても気付き、目標や学習内容に取り入れていることが分かった。

一方で、極端に言えば、生徒が個別の指導計画作成に参画しなくとも、本人の思いを的確に把握して作成されているとも考えられる。しかし、生徒が自分の課題に向き合い意欲的に取り組む様子からも、「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」を作成して、活用することは有効だと言える。本研究の実践は前期より開始したため、「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」の内容を後期の指導目標に取り入れた。

自立活動の内容から自己理解を図る際、自立活動の内容が6区分27項目と幅広いため、生徒の言葉だけでは、特に知的障害児の場合は曖昧な表現になりやすく、理解を深めることが難しい場面があった。そのため、担任Dが「○○ということですか。」など、言葉を補足することで、生徒自身が理解を深めることにつながった。また、菊地(2020)は、児童生徒の思いや願いを反映することの重要性を述べている。本実践でも、目標を設定する際に生徒の思いを反映すると、初めは、「携帯電話を持ちたい」という一見単純な欲求にも感じる目標であった。そこで、なぜそのように答えたのかについてやりとりすることで、「携帯電話を持って、いろいろな人とやりとりをしてつながりたい。」と補足し生徒の真の思いを捉えることができた。最初に立てた卒業時になっていた目標(第5時)と、約半年後に改めて確認した目標(第10時)とを比較しても、大きく変わらない目標であった。このことは、本人参画型の指導計画を活用したことで、目標を継続して意識できた結果だと言える。

評価(振り返り)に関して松田・是永(2020)は、自己評価に関する課題を挙げている。本実践においても、できたかできなかったかといった振り返りでは、「よくできた」と答えるが、なぜよくできたのかについては曖昧であった。そのため、「どのようなところからそのように思えたのか」「○○のようなことがあった」と事実を伝えて聞くことを繰り返すことで、「やっぱり○○だった。」と自分の行動を振り返って変更することができた。自立活動の指導は、指導効果が即時的ではないことが多

い。そのため、生徒の立てた目標の姿が見られた時に、教師が即座に伝えたり事実を記録したりして変容を伝えることが、生徒が目標を意識し、適切に自分を振り返ることにつながると言える。

(2) 自立活動の指導実践の内容

志鎌(2020)の実践は、対象生徒の事例拡大と、生徒本人が参画した自立活動の個別の指導計画作成後の指導実践の有効性や評価等の検証について課題としていた。本研究は、対象生徒を3事例に増やし、指導実践まで取り組んだ。高橋・藤井(2020)は、生徒本人を主体とした個別の教育支援計画を作成して目標や方法を具体的に考えられるようになったことを示している。本実践でも、生徒と振り返りながら更新し、「落ち着いて過ごす」「ていねいなかわりをする」と言った大雑把な内容も、「更衣室で(一度)休憩する」「聞き返すときの(返事の)声に気をつける」など具体的な方法まで考えられるようになっていく。個別の教育支援計画に限らず、自立活動の個別の指導計画においても、本人が参画することは効果があると言える。また、3名あるいは個別の学習であったことも、自分で立てた目標や学習内容に対して、どのようにしたらよいかイメージしながら考えて取り組むことができたと考えられる。

一方で、目標や学習内容について本人主体で考えるため、自分の好きなことに取り組む学習に陥ることも考えられる。これは、『解説自立活動編』にあるように、「言葉と言葉を組み立てて話すことが難しい」といった知的障害児に見られる、顕著な発達の遅れや配慮を必要とする知的障害に随伴する状態と関係している。また、自閉症がある場合、自己の理解が困難な場合がある。そこで、教師が生徒の将来像や現在の様子から、目標や学習内容を確認したり生徒自身が書いたりしたことで、自立活動の目標にある、困難さを改善・克服することへの意識付けにつながった。

学習内容を具体的に設定することが難しい場面では、教師がその時の生徒の姿を具体的に伝えて、どのようにになりたいか確認することで、生徒が自分の姿を思い浮かべられている。生徒の実態に合わせてシートを工夫したり、随時教師が整理して示したりすることも、追記・更新して、本人が参画しやすくなったと言える。

(3) 学校での様子(各教科等や普段の様子との関連)

『解説自立活動編』は、自立活動の指導と各教

科等との関連を重視している。「本人参画型の自立活動の指導計画」を作成し、実践中や実践後の生徒の姿(表2)から、各教科等との関連について、担任D(筆者)と担任Eの考察を以下に示す。

事例1・事例3・事例8は、自立活動の指導から自分の健康面の気付きにつながり、保健体育や総合的な探究の時間に関連した事例と言える。自分の課題に気付き、解決するためには友人と走ることや継続して走ること、水分を摂ることといった改善する方法にまで発展することができた。走った周数や体重などは数値で表せるため、生徒も意識しやすいと言える。

事例2・事例6は、生徒自身の言葉を活用した事例であった。よりよい将来をイメージする際、生徒自身が話す言葉を用いることで、言葉遣いの改善につながっている。昨年度から担任している担任Eも「丁寧になっている。」と効果を感じている。さらに、各教科等で学んだことが自立活動の指導にも生かされる事例だと言える。

事例4は、気持ちの理解の困難さに対する保護者からの相談について、SNSのチャットのようなやりとりをしたいという生徒Aの思いを活用して、気持ちの理解につながった事例だった。菊地(2020)が生徒の思いを反映することの重要性を挙げているように、生徒の興味や願いを活用することは、課題の改善につながる有効な方法になると言える。また、生徒だけでなく、保護者の困りにも対応でき、効果的な実践例だと考える。

事例5・事例7・事例9は、気持ちが不安定になりやすい状況で生徒自身が考えて決める指導が有効に働いた事例と言える。生徒は自閉症もしくは自閉的傾向にあり、予想外のことがあると、情緒が不安定になりやすい。本実践では、不安定になった時にどのようにしたらよいかに加え、自分の気持ちへの気付きや、不安定になる要因に対しても気付きを促す指導を行った。そのため、不安定にならないための予防効果にも働いたと考える。担任Eも「理由が分かり、切り替えが早くなっている。」と効果を感じている。ただし、このような事例は、目標や学習内容と自己理解を行き来して何度も繰り返し実践することが必要だと言える。

(4) 総合考察

「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」を作成し活用することで、対象生徒3名がそれぞれ自分のことを理解し、なりたい自分や取り組む課

題について日常的に意識した行動が見られた。内容を随時更新して、自分自身を振り返りながら目標の自分を目指すようになったことから本実践は有効であると言える。

また、『解説自立活動編』は、自立活動の指導は、学校の教育活動全体を通じて適切に行い、各教科等との関連性を重視している。その際、三浦(2020)の指摘のように、自立活動の指導目標や内容を明確にした上で各教科等と関連させることが重要である。本実践においても、実際の自立活動の指導目標と本人参画型とが関連していたため、「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」を基にして、指導目標や内容を混同せずに実践できた。このことから、本人参画型は有効であると言える。

5 今後の課題

本研究は、「本人参画型の自立活動の個別の指導計画」を作成し、その後の指導実践まで、約半年間の実践を検証した。実践は、本人参画版の自立活動の個別の指導計画の実践という趣が強かった。個別の教育支援計画にあるような、本人の思いや保護者の願いも取り入れ、本人も参画した個別の指導計画が作成されるようになることが今後の課題である。知的障害児の場合、知的発達程度は様々である。本研究は高等部生徒の実践であったが、児童生徒が自立活動の個別の指導計画作成に参画しやすいよう、教師は、実態に合わせて個別の指導計画のシートを作成したり、児童生徒の様々な様子から内面などを推察したりすることが必要だと考える。

また、児童生徒本人が自立活動で学んだことをより具体的に振り返って、各教科や合わせた指導などに汎用できるようになるためには、指導をさらに工夫することが求められる。学校の教育活動全体で指導を行う場合、自立活動の目標や指導内容を整理して、各教科等の指導と混同しないように留意する必要がある。

6 謝辞

本研究を試みるにあたり、多くのご協力をいただいた生徒とご家族、勤務校の先生方に感謝を申し上げます。

引用文献

藤井和子・窪田幸子・保坂俊介・佐野耕志(2018)

「知的障害のある児童生徒に対する自立活動の指導に関する基礎的研究」、『上越教育大学研究紀要』, 第37巻第2号, 469-478.

藤井慶博・高田屋陽子(2017)「個別の教育支援計画の作成と活用に関する現状と今後の方策-特別支援学校教員に対する質問紙調査から-」、『秋田大学教育文化学部研究紀要, 教育科学部門』, 72, pp. 93-101.

今井善之・生川善雄(2014)「知的障害特別支援学校における自立活動の現状と教員の課題意識(Ⅱ)」、『千葉大学教育学部研究紀要』, 第62巻, 75-83.

菊地一文(2020)「知的障害教育における自立活動の課題とその対応方策」、『特別支援教育研究』, No. 757. pp. 2-4.

松田弥花・是永かな子(2020)「E 県立知的障害特別支援学校における自立活動に関する現状と課題」、『高知大学学校教育研究』, 第2号, 115-123.

三浦光哉(2020)「自立活動の理解度チェックとポイント」, 三浦光哉(編著), 『本人参画型の「自立活動の個別の指導計画」理解度チェックと指導計画の様式』, ジアース教育新社, pp. 9-20.

文部科学省(2018)『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編(幼稚園・小学部・中学部)』, 開隆堂.

文部科学省(2019)『特別支援学校高等部学習指導要領』, 開隆堂.

文部科学省(2019)『特別支援学校学習指導要領解説総則等編(高等部)』, 開隆堂.

志鎌知弘(2020)「知的障害児に対する『自立活動の個別の指導計画』-本人参画型の作成と活用-」, 『山形大学大学院教育実践研究科年報』, 第11号, 264-267.

高橋基裕・藤井慶博(2020)「当事者主体の個別の教育支援計画の実践とその効果に関する研究」, 『発達障害研究』, 第41巻, 第4号, pp. 343-354.

“Individual Teaching Plans for Self-Reliance Activities(Jiritsu Katsudou)” Aimed at Children with Intellectual Disabilities : The Effectiveness of the Creation and the Utilization of Student Participation Styles
Tomohiro SHIKAMA